

児童福祉施設における子どもの性に関する保育士の対応

—保育士養成課程における施設実習を通して—

伊 藤 陽 一・黒 沼 茉 未

On The Correspondence Between Nursery Teachers Dealing With The Sexuality Of Children In Welfare Institutions

— Through Facilities Practice Of Nursery School —

ITO Youichi and KURONUMA Mami

キーワード：性、保育士、児童福祉施設

はじめに

筆者らが勤務している埼玉東萌短期大学（以下「本学」という）は、保育士・幼稚園教諭養成系短期大学として、平成23年4月に開学した。本学の設置主旨の中に、「社会環境の変化に対応し、社会的要望を具体化していくためには、これまでの専門学校時代の職業的実務的な「専門性養成の教育」だけではさまざまな問題に対応できる十分な人材育成が困難になっている。そこで短期大学に改組することで、これまでの専門学校とは異なった理論的なものごとを考え学術研究に基づいた「人間性形成の教育」を行うことで柔軟な思考力、状況に応じた判断力を兼ね備えた人材の育成を計画するに至った」とあり、乳幼児から児童・青少年までの教育及び福祉の専門職を養成することを目的として、平成25年3月に第1期生の卒業生を送り出す。

一方、今日のわが国では、少子・高齢化・核家族化が進み、さらに経済が冷え込み新たに貧困問題等の社会の変化が浮上してきて、子どもや子どもを育てている家庭が直面せざるを得ない状況となっている。このような社会的な潮流の中で保育士の専門性が多様になり、その必要がこれまで以上に期待される中で、保育士養成校の責任は重い

と考える。本学では、専門学校から短期大学に改組し、「理論的な学術研究に基づいた「人間性形成の教育」を行い柔軟な思考力、状況に応じた判断力を兼ね備えた人材の育成を計画する」と設置主旨に課題を挙げている以上、本腰を入れて保育士養成に取り組む必要があると考える。

保育士養成における実習の意味合いは高く、平成21年2月27日厚生労働省雇用均等・児童家庭局長より出された「指定保育士養成施設における保育実習の実施基準について」による保育実習の目的は、「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」とある。このことを踏まえて本稿では、施設実習についての実習生のあり方に着目し、とりわけ、利用児・者の「性」に関する支援について研究を行うことにした。

I 目的

児童福祉施設や学校における性に関する現状や課題などを先行研究から明らかにしていく。また保育専攻学生への質問紙調査から児童福祉施設において、保育士・指導員という専門職として性に関する課題に対応していくことへの、保育専攻学生の意識や保育士養成課程に求められる教育内容

のあり方を検討していく。

Ⅱ 研究の概要

1 研究方法

A県の保育士養成課程に在学する学生に質問紙調査を行う。また、医学中央雑誌およびCiNiiによる雑誌索引のデータベースに登録されている文献から、「性、児童福祉施設、保育士、学校」をキーワードとして検索していく。会議録など具体的な内容について記載のないものを除外し、これらを施設、校種ごとに分類して実践に関する文献に関して得られた結果を述べる。

2 調査対象者

A県の保育士養成課程に在学し、二年次の5月と11月の施設実習に行った者50名に対して自記式質問紙調査を行い有効回答が得られた43名を対象とした（回収率100%、有効回答率86%）。直接質問紙を配布し、自由記述が十分に書けるように学生の様子を見てから回収した。（調査期間：平成24年11月初旬）

3 倫理的配慮

調査対象者である学生に対して、研究目的と内容を文書にて説明し、参加の自由、中断の自由、匿名性の保持の厳守、調査で得られた情報は研究以外の目的で使用しないことを伝え、調査の同意を得た。また名前や年齢などは一切記入せず記入者が特定できないように配慮した。

調査で得られた調査結果は研究者のみが管理し、研究以外の目的では使用しないことを付記しておく。

4 調査項目

質問項目として、「①施設実習における性的アプローチ（抱きつかれた）や性に関する発言や行動（性的なことを言われた、性に関する行動を見た、性に関する話し合いがもたれていた、など）の有無とその内容」「①の記述内容に関してどの

ように感じたか」「①の記述内容に対してどのような対応（〇〇に相談、自分の中でこう考えるようにした、など）をしたか」「児童福祉施設における性の対応をどのように考えるか」の4項目について、記述式の回答を求めた。

Ⅲ 結果と考察

1 本学における施設実習の現状

保育士は、児童福祉法第18条の4で、「第18条の18第1項¹⁾の登録を受け、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう」と位置付けられ、その職務には、保育所のみならず、児童福祉施設や一部の社会福祉施設で子どもや利用者の保育・療育等を担当することも想定されている。保育士養成課程では、保育所での実習だけでなく、居住型児童福祉施設等での実習も要件とされている。ここでは、保育士養成課程における施設実習の位置づけと、本学における施設実習の位置づけについて述べたい。

（1）保育士養成課程における施設実習

保育士のあり方は、児童福祉法の総則第1条、「すべて国民は、児童が心身ともに健やかに生まれ、且つ、育成されるよう努めなければならない。2 すべて児童は、ひとしくその生活を保障され、愛護されなければならない。」の児童福祉の理念、同法第2条、「国及び地方公共団体は、児童の保護者とともに、児童を心身ともに健やかに育成する責任を負う。」及び同法第3条の「前2条に規定するところは、児童の福祉を保障するための原理であり、この原理は、すべて児童に関する法令の施行にあたって、常に尊重されなければならない。」とあり、児童の育成の責任、原理の尊重が示されている。このことから保育士のあり方は、児童福祉の基本的理念を踏まえたうえで、育成される子どもと育成する保護者に対して、責任の一翼を担った専門職といえる。

子どもや家庭を取り巻く社会の変化や、保育士や保育所に求められるニーズの多様化にあわせて、児童福祉法の一部を改正する法律（平成 13 年法律第 135 号、平成 15 年法律第 121 号、平成 20 年法律第 85 号）等によって整備された保育士関係規定が施行されたことや保育所保育指針の改定（平成 20 年 3 月 28 日に改定、平成 21 年 4 月 1 日施行）が行われたことにより、「指定保育士養成施設の指定及び運営基準について²⁾」や「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）³⁾」の通知や報告が行われ、保育士養成課程における施設実習の意義も見直されていった。

「指定保育士養成施設の指定及び運営基準について」の「（別紙 2）保育実習実施基準」の「第 1 保育実習の目的」では、「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」と保育実習の目的を明示している。また、「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」では、保育士養成課程における実習の実施基準を、今までは、必修科目「保育実習（実習）」（5 単位、20 日）を必修科目「保育実習Ⅰ（実習）」（4 単位、20 日）と「保育実習指導Ⅰ（演習）」（2 単位）にし、「保育実習Ⅱ」（2 単位、10 日）と「保育実習Ⅲ」（2 単位、10 日）がそれぞれ選択必修科目となっていたが、これに「保育実習指導Ⅱ」（1 単位）また「保育実習指導Ⅲ」（1 単位）が加わっている。「保育実習Ⅰ」では、「保育所及び乳児院、母子生活支援施設、児童養護施設、知的障害児施設、盲ろうあ児施設、肢体不自由児施設、重症心身障害児

施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設、知的障害者更生施設（入所及び通所）、知的障害者授産施設（入所及び通所）、児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園」での実習が求められている。「保育実習Ⅱ」では保育所での実習、「保育実習Ⅲ」では、「児童厚生施設又は知的障害児通園施設その他社会福祉関係諸法令の規定に基づき設置されている施設であって保育実習を行う施設として適当と認められるもの（保育所は除く）」として、いわゆる通所型施設での実習が可とされている。

このように保育士の資格を得るためには、保育所実習のみならず、居住型児童福祉施設等での実習も要件とされている。このために、「指定保育士養成施設の指定及び運営基準について」により、保育士養成施設ではしっかりと準備を行い、実習を進めることとされている。

（2）本学の施設実習

本学の保育実習の目的は、教育実習と共に学生に周知すべく学生便覧に書かれている。その目的は、「実習の目的は、保育・幼児教育の現場を直接に体験するとともに、学校で学んだ保育・幼児教育の学習を、学習者が保育・幼児教育の現場に適応し応用するという主体的・体験的な学習を通して、実践と向き合うことができる優れた保育者・幼児教育者となることができるようにする」ところにあります」ということが目的となっている。

「保育実習」は保育士資格取得に必要な実習で、次の実習から成っている。合計 270 時間以上の学修が必要である。①保育所実習（必修 90 時間以

表 1 保育士養成課程の改正案

	現行				改正案			
	系列	科目	設置単位数	履修単位数	系列	教科目	設置単位数	履修単位数
必修科目	保育実習	保育実習（実習）	5	5	保育実習	保育実習Ⅰ（実習）	4	4
						保育実習指導Ⅰ（演習）	2	2
選択必修科目	保育実習Ⅱ又はⅡ（実習）		2	2		保育実習Ⅱ又はⅡ（実習）	2	2
						保育実習指導Ⅱ又はⅡ（演習）	1	1

（出典：「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」の「別表 1」を抜粋し作成）

上)「保育実習B」(2単位)、②施設実習(必修90時間以上)「保育実習C」(2単位)、③保育所実習または施設実習(いずれか選択必修90時間以上)「保育実習Ⅱ」(2単位)、または「保育実習Ⅲ」(2単位)である。また、教育実習については、幼稚園実習(必修20日間以上)「教育実習(幼稚園)Ⅱ」(4単位)で、幼稚園での教育実習は、1年後期に10日間、2年前期に10日間、合計20日間となっている。

表2 実習の科目名と実習年次

実習の種類	科目名	実習内容	年次等	単位
保育実習 (保育士資格取得に必要)	保育実習B	保育所実習	1年次2月	2
	保育実習C	施設実習	2年次5月	2
	保育実習Ⅱ または 保育実習Ⅲ	保育所実習	2年次11月	いずれか2
		施設実習	2年次11月	
保育実習 (幼稚園教諭免許状取得に必要)	教育実習(幼稚園)	幼稚園実習	(前半)1年次11月	4
			(後半)2年次6月	

(出典：埼玉東萌短期大学「2012 学生便覧」より)

施設実習における内容とねらいは、施設で利用児(者)や指導員と生活を共にすることにより、児童福祉施設の果たす役割や職務内容、環境構成について理解する。さらに、施設の利用児(者)との関わり合いから、保育や福祉への理解を深めることである。具体的な内容は、①施設での一日の流れを観察し、理解する。②施設での職務内容と利用児(者)への保育姿勢(対応)を理解する。③保育者として児童福祉とその関わり方を理解し、その資質を高める。以上の3点になる。

また、保育実習指導として本学では、実習前指導及び実習後指導があり、その中で、実習前と実習中の留意点として、①オリエンテーション：実習に際しての心構えや実習施設の略歴・利用児(者)の状況を把握するため、施設の指示に従ってオリエンテーションを必ず受けること。②健康管理：自己の健康管理には十分に留意すること。細菌検査の結果は、各自、実習開始前に施設に提出すること。③目的理解：施設実習の目的・意義を理解し、実習に臨むこと。利用児(者)に対

する養護・教育・ケア・治療などに関する基礎知識も把握すること。④施設職員との人間関係に留意し、何事にも率先して取り組むこと。⑤特定の利用児(者)だけに接するのではなく、広く利用児(者)に愛情を持って援助をすること。⑥実習時間中は定められた休息以外に実習生同士で私語はしないこと。持ち場を離れる時や、施設のものを使用する時には了解を得ること。⑦自分の勝手な判断で行動せず、必ず指導員の指示を仰ぐこと。⑧欠席・遅刻・早退は絶対にしないこと。やむを得ず欠席・遅刻・早退する場合は、その理由を前もって実習先および学校に申し出ること。⑨行動しやすく、清潔感のある服装であること。頭髪は黒髪で、長い場合は束ね、児童の観察視野を狭くしないように心掛けること。アクセサリーはつけない。爪は短く切り、マニキュアやペディキュアはしない。⑩挨拶、言葉遣いは明瞭快活であること。時と場合に応じた言葉遣いを心掛け、保育者としての自覚を持つこと。以上の10点について指導を行っている。また、オリエンテーションの受け方、実習日誌の書き方、個人票や出勤簿等の書類の書き方等を行っており、施設における支援の具体的内容はここでは行っていないのが現状である。

2 児童福祉施設における日常生活支援の現状

児童福祉施設における子どもに対する支援として、入所児に対して行う日常生活支援と入所児とその保護者に対しての家庭支援、施設を出た後の進路・就職、そして、退所後の支援等の自立支援を中心に行われている。性に関する知識や指導・助言は、日常生活支援の中で行われ、直接処遇職の保育士・児童指導員らが中心となって行っている。

(1) 児童福祉施設(児童養護施設及び知的障害児施設)の現状

児童福祉施設⁴⁾は、現在、助産施設、母子支援施設、乳児院、児童養護施設、児童自立支援施設、情緒障害児短期治療施設、児童家庭支援セン

ター、保育所、児童厚生施設、障害児入所施設、児童発達支援センターの11種になっている。この中で、親（保護者）から離れて生活をしているために、性についての支援（性教育）が特に必要であると考えられる施設は、児童養護施設、児童自立支援施設、情緒障害児短期治療施設、障害児入所施設であり、同様に障害者支援施設（旧法知的障害者更生施設、旧法知的障害者授産施設）等の成人の施設も対象としてあげられる。以下に本学の学生が施設実習として学ぶ施設の概要を説明したい。なお、本学の施設実習は、2年次の5月（保育実習Ⅰ）と11月（保育実習Ⅲ）に行われる。

1）児童養護施設

平成24年度の施設実習において児童養護施設で実習を行った学生は、13人である。児童養護施設は、児童福祉法の第41条で、「保護者のない児童（乳児を除く。ただし、安定した生活環境の確保その他の理由により特に必要のある場合には、乳児を含む。以下この条において同じ。）、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設とする。」とある。施設総数は、578か所で入所児童数は、31,593人となっている。

2）情緒障害児短期治療施設

平成24年度の施設実習において情緒障害児短期治療施設で実習を行った学生は、2人である。情緒障害児短期治療施設は、児福法の第43条2に規定され、「軽度の情緒障害を有する児童を、短期間、入所させ、又は保護者の下から通わせて、その情緒障害を治し、あわせて退所した者について相談その他の援助を行うことを目的とする施設とする。」とある。施設総数は、37か所で入所児童数は、1,104人となっている。

3）障害児入所施設及び障害者支援施設

平成24年度の施設実習において障害児入所施設で実習を行った学生は、3人（重症心身障害児

施設2名、知的障害児施設1名）である。障害児入所施設は児福法の第42条に規定され、「障害児入所施設は、次の各号に掲げる区分に応じ、障害児を入所させて、当該各号に定める支援を行うことを目的とする施設とする。1 福祉型障害児入所施設 保護、日常生活の指導及び独立自活に必要な知識技能の付与 2 医療型障害児入所施設 保護、日常生活の指導、独立自活に必要な知識技能の付与及び治療」とある。

また、平成24年度の施設実習において障害者支援施設で実習を行った学生は、61人（入所施設17名、通所施設34名）となっている。

（2）施設における日常生活支援

欲求段階説を唱えたマズロー（Abraham. H. Maslow）⁵⁾は、人間のニーズ（欲求）を、「生理的ニーズ」を最も基本的な底辺に置き、「安全の欲求」、「所属と愛の欲求」、「承認（尊重）の欲求」、「自己実現の欲求」、以上の5段階で捉えた。このことは児童福祉施設や社会福祉施設で生活をしている利用児・者にとって、「食事が取れて、住むところがあって、安全に生活できる」といった基本的ニーズの充足だけではなく、利用児・者の自己の希望や将来のビジョンを追求する「自己実現」を可能にする生活の質の充足が必要だということになる。このように施設において利用児・者にとって基本的なニーズと生活の質を充足させる支援は、施設における日常生活支援であるといえるだろう。施設における日常生活支援は、児童・成人、養護系・障害系等の年齢や種別を問わず施設において、①安心して日常生活を営むことができること。②入所している利用児・者が抱えている問題や困難な状況の解消・解決に取り組むこと。③入所している利用児・者がその能力に応じた進学・就職等の自己の希望や可能性を追求する、独立自活をすることができることがあげられる。具体的な支援としては、衣・食・住・保健衛生・お小遣い金銭管理・学習・余暇活動等、そして性についての支援（性教育）がある。

(3) 日常生活支援における性についての支援 (性教育)

子どもが大人へと成長して人生を歩んでいくために、性的に自立することは、極めて重要な側面である。しかし今日のわが国では、社会的にも性に関する情報が氾濫し、少女売春の横行やインターネットやテレビ、雑誌などにおいて不適切な性に関する情報が多く見られ、性に対しての価値観が錯綜している。このような状況は、知的な障害がある子どもや成人も同様であるといえる。この社会背景の下で、親と離れて暮らす施設入所児・者は、すでに社会環境や家庭環境の悪影響からもたらされる性知識や性行動を行っている状況がある。そして、性の被害者にも加害者にもなってしまう現状があるといえる。

このような施設における性に関する支援の研究に着目すると、その目的について、児童福祉施設(児童自立支援施設)に勤務する石澤方英(2011)⁶⁾は、「性非行を主訴としている児童に対して“性”に対するアプローチをほとんどしていないという現状を知ったことです。そして、実際に性的問題は施設内で起こることを目の当たりにしたことです」と述べている。また、児童福祉施設(児童養護施設)のケアワーカー⁷⁾と保健医療の専門職である助産師の取り組みについて研究した福知栄子・鈴木かおり・梅野潤子ら(2009)⁸⁾は、施設の入所児に対しての健康ニーズは、「児童相談所からの子どもの健康に関する情報、施設の嘱託医師による定期検診、学校での健康診断、あるいは病気やけが、障害など個別的な健康ニーズへの対応がなされている」とし、一方で性のニーズについては、「児童養護施設で暮らす子どもたちの性の健康にかかわっての支援は、必ずしも準備されているわけではなく、ワーカーが個別に対応している状況である」と述べ、さらに「ワーカーは社会福祉あるいは保育教育を受けた者が多く、性の健康に関する知識やそれを子どもに伝えるための技術を十分に有している者は少ないと思われる」と指摘し、子どものケアの中心となるワーカーと保健医療の専門職の連携が必要であると述べてい

る。さらに、榊原文・藤原映久(2011)⁹⁾は、児童の性暴力を防止するために性(生)教育プログラムを製作しその効果を測定した。その結果として、「児童養護施設職員のストレス尺度¹⁰⁾」を作成・実施したが、このプログラムを導入して、児童養護施設職員のストレスを増大させる結果にはならなかったとしている。これらのことから、施設の現場において性的な問題があり支援が必要だということ、その問題に関わる保育士等の専門職が性に関わる知識・技術を有していないこと、施設に勤務して日常生活支援(性に関する支援を含む)を行うとストレスがあり、支援プログラムを作成し実施するとストレスが低減することが指摘されている。

現在、児童福祉施設及び社会福祉施設に勤務している職員の、日常生活支援における性についての支援(性教育)はこのような状況である。施設実習に向かう学生は利用児・者にどのように対応すればよいのだろうか。

3 性に関する現状

何らかの事情で親と過ごせない子どもや、知能面で困難さをもった子どもなどがある児童福祉施設は、子どもたちにとって生活を通して自己実現を図っていく場である。日々過ごすなかで性的な言動が見られたり、思春期を迎えるものが複数いたりするなかで、性について伝えていくことは必要不可欠であり、そこで働く保育者の性に関しての対応や専門的役割が求められる。そのため、中高生や若者の性に関する現状と、保育士養成課程に入学する以前の学校教育における性に関する指導の現状を踏まえ、高等教育に在学する学生の性に関する価値観や意識、これまでの性に関する学びがどのようなものであるのかを検討していく。

(1) 性に関する調査

1) 厚生労働省エイズ動向委員会調査より

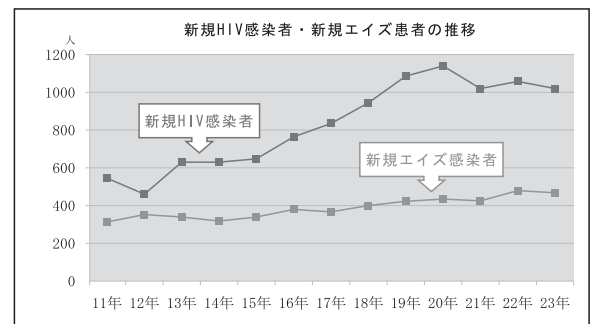
平成24年2月に、厚生労働省エイズ動向委員会¹¹⁾から新規HIV感染者、エイズ患者数(人)が発表された。この調査によると、平成23年の

新規H I V患者数は平成 22 年よりも 56 件減って 1019 件であり、この数字は過去 5 番目に多い数字となっている。一方で、新規エイズ患者は平成 22 年よりも 2 件減って 467 件であり、過去最高だった平成 22 年に次いで過去 2 番目に多い数字となっている。去年と比較すると件数は減っているが、新規H I V患者数とエイズ患者の過去 12 年間の推移をグラフで見ると、件数が高い状態にあり、減少を楽観視することは出来ないだろう。厚生労働省エイズ動向委員会では、全国の都道府県でH I V検査の受検数も調査している。この調査によると、無料匿名で受けられるH I V抗体検査を受ける者は平成 20 年までは増え続けていたが、平成 21 年から減少し、平成 23 年も大きくは変わらずに減少のままとどまっている。この調査から、H I V感染者が減少に転じている原因に、H I V抗体検査が減少に転じているという可能性がある。つまり、潜在的なH I V感染者が増えているということが考えられる。これと関連しているデータに、自分がH I Vに感染していると気づかず、エイズを発症してから感染に気づく、「いきなりエイズ」が平成 21 年から増加傾向にある。感染症に対する具体的な知識が不足した状況で行動のみが先行してしまう現状に危機意識を高くもち、課題解決を考える必要がある。

H I V感染症だけでなく若者の性感染症も問題視されており、平成 16 年の旭川医科大学の調査¹²⁾によると性交経験のある高校生の 10 人に 1 人が性感染症の一種であるクラミジア感染症に感染しているという。厚生労働省の感染症発生動向調査¹³⁾によると、平成 23 年において、クラミジア感染症は 10 歳から 14 歳で 35 人、15 歳から 19 歳で 2891 人、20 歳から 24 歳で 6420 人、25 歳から 29 歳で 5552 人、30 歳から 34 歳で 2879 人となっている。平成 11 年からの推移でみると減少傾向であるが、他の年齢と比べると 10 代前半から 20 代にかけて報告数が多くなっている。性行動が低年齢化し性に関する知識が乏しいなかで危機意識がないままにすることが危惧される。西頭らの調査¹⁴⁾によると、中学生の性に関する情報源は友人が最

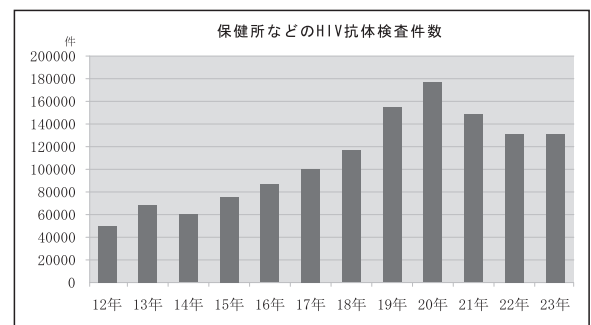
も多く、次いで雑誌やビデオなどのメディアであり、生徒の約 6 割が友人と性に関する会話をしている友人の性的な行動や経験への関心が高いという研究がある。性の健康問題が増加している背景には意識の変化、社会変化に教育が対応できていない現状が考えられ、自分の行動に影響を与えるものが友人やメディアの情報という結果を考えると、安易な性行動が幅広い年齢の者へと助長されてしまうことは予測出来る。子どもの生活をともにつくっていく施設保育士も、子どもが偏った情報に振り回されていることがないようにしなければならぬ。保護者の情報源もメディアが最も多いという調査もあるなかで、子どもと対応していく者自身がメディアリテラシーをもって、正しい知識のもとで子どもと向き合う必要があるといえる。

図 1 新規H I V感染者・エイズ患者の推移



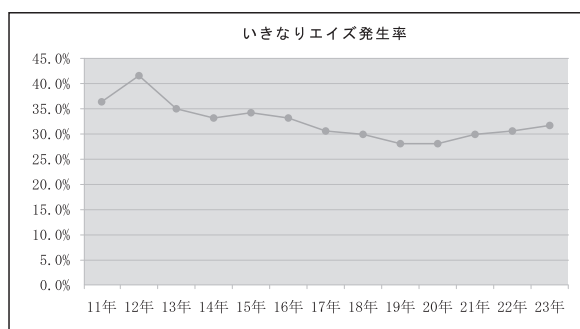
(出典：厚生労働省エイズ動向委員会「平成 23 (2011) 年エイズ発生動向」)

図 2 保健所H I V検査受検数



(出典：厚生労働省エイズ動向委員会「平成 23 (2011) 年エイズ発生動向」)

図3 いきなりエイズ発症率



(出典：厚生労働省エイズ動向委員会「平成 23 (2011) 年
エイズ発生動向」)

2) 青少年の性行動全国調査より

日本性教育協会が行っている調査に、青少年の性行動全国調査¹⁵⁾というものがある。この調査は昭和 49 年から行われており、日本の青少年(中学生、高校性、大学生)の性行動や性意識の変化を全国規模で時系列的に把握することができる。最新の調査は平成 23 年に行われ、これまで 7 回調査が行われている。継続的に調査し質問内容の共通部分を用いることで、着目したい対象の変化を知ることができる。つまり、この調査結果とこれまでの結果とを比較することにより、青少年の性行動の変化の実態を明らかにすることが出来る。さらに、変化があるならばどのような変化なのか、影響を与えているものは何かを考え社会背景と性行動の関連性を導いていくことも出来る。

今回の平成 23 年の調査は、前回調査が行われた平成 17 年の調査と比べると、男子大学生では 7 ポイント、女子大学生では 14 ポイントも性交経験率が低下している。高校生では、前回調査が行われた平成 17 年の調査と比較すると、女子高校生は 7 ポイントの低下、男子高校生は 12 ポイントの低下と、特に男子で性交経験率の低下が著しい。中学生を見ると、男女ともに性交経験率は 2～4%で推移しており、少数の者が経験する性行動となっている。しかし、低下したことだけに着目してもそれが良いことであるか悪いことであるかは明らかにすることは難しい。日本性教育協会が行っている調査は対象の選別にも偏りがないよう工夫しているが、低下した原因を考え、それ

が性の問題行動の抑制につながっているのかを明らかにしていくことが課題である。

また、特に男子高校生で携帯やメールを頻繁に使う者は性行動が活発化し、それほど利用しない層では性行動の経験率が低下している可能性も考えられるという結果が出ており、性行動の分極化という現象があるという。SNS の活発化やスマートフォンの普及など近年の情報化の流れは、さらに勢いをましている。インターネットによる情報網が中学生や高校生の性行動に影響を及ぼしていることは容易に考えられることであり、このような情報源を媒介とした中高生の性の問題行動も起きている。子どもの性被害を防いだり性の在り方を考えていったりするうえで、まず人間関係のあり方の変容や、インターネットによる人間関係づくりを注意して見ていかなければならない。子どもの生活と関連づけながら性行動に影響しているものを分析し、性の問題行動やハイリスク要因を明らかにし防ぐことが求められているといえる。

(2) 性の問題行動

青少年の性行動全国調査を 1970 年代からみていくと、中学生や高校生は 1990 年代からデート、キス、性交経験に大幅な上昇が見られた。これは、これまで以上に中高生の性行動が日常化しているといえるだろう。平成 14 年に東京都性教育研究グループが行った調査¹⁶⁾によると、高校 3 年の女子生徒の性交経験率は 44.3%、男子生徒の性交経験率は 35.7%だという。1980 年代の調査では、女子生徒の性交経験率は 18.5%、男子生徒の性交経験率は 27.7%であり、性行動の若年化は明らかである。性行動が低年齢化しているのに教育内容の見直しが進まないことで、リスク要因を増やすことになるだろう。先に述べた性感染症だけではなく、望まない妊娠が起こる可能性は大いにある。平成 22 年の衛生行政報告¹⁷⁾によると、20 歳未満の人工妊娠中絶は 20357 件と減少傾向にある。しかし、15 歳の人工妊娠中絶は 1057 件、15 歳未満は 415 件と、平成 22 年は一気に増加している。携帯やメールを頻繁に使う者は性行動が

活発化しているという結果は、コミュニケーション能力を苦手とすることで体の結びつきによって関係性を保とうとする若者の性行動の問題である。インスタントセックスが低年齢化している可能性も考えられる。インスタントセックスとは、ごくありふれた生活の一部として、性の乱れが行われていることである。例えば携帯電話からインターネットにアクセスし、知らない者と性行為にいたり、不特定多数の者と性行為にいたり、性行為そのものが遊びと化していることなどである。この問題行動の背景には、寂しさを埋めたい、誰かに必要とされていない、という心理状態がある。

鈴木¹⁸⁾の調査によると、家庭の経済的文化的な基盤の規定要因と考えられる父親の職業、家庭の生活状況、経済的な問題が男子高校生の場合にはハイリスクな性行動（避妊を伴わない性行動や、多数のパートナーとの性行為）とのつながりがあり、女子高校生の場合には、目標学歴の低さとハイリスクな性行動につながっているという。また、「友人から大切にされていると感じるか」「親から大切にされていると感じるか」「現在の自分が好きか」などの質問からなる対人関係上の問題や自己肯定感の低さが高校生にとって、ハイリスクな性行動につながりをもっていた。つまり、性行動が日常化しているといえるような現在でも、性行動へのつながりと普段の生活には大きな関係性があり、生活状況によって大きな差が出ていることになる。家庭や学校での生活状況、人間関係や自己肯定感など、生活の中で充足されていない思いがあるものほどリスクの高い性行動をとっており、ハイリスクグループが形成されている。2011年の青少年の性行動全国調査では高校生の性交経験は減少していたが、性行為の現状はより複雑化しているといえるだろう。中高生にとっても性の問題行動の原因には自分の居場所を探し性行為という手段によって人との関係性を生んで必要とされている実感や、相手も寂しさを感じている、という共感を得ることで今をいられる、ということがありとえられる。鈴木¹⁸⁾の調査でも何に自己実現

を見出すかが性行動に影響を与えていることが明らかになっており、経済的に進学が難しい者にとって選択が出来ない状況で目標を見出していくことは難しいといえる。経済的問題だけではなく父子家庭や母子家庭では、親と過ごす時間が少なくなりがちである。思春期をむかえ複雑な感情を抱く時期に、自分の考えを上手く伝えられなかったり、伝える相手がいない、分からない、愛情に飢えている、という心理状態は大きな孤独感を生むように思う。児童養護施設で生活している子どもで十分な愛情をもらって育ってきたものは、そう多くはないだろう。何らかの事情で親と生活することが難しかった子どもにとっては保育者がその役割を担っていく必要がある。家庭や生活状況によって子どもの性行動に影響することを考えると、一人ひとりの個人の生活史に着目し、今必要となる愛情的支えや教育が必要だといえる。基本的信頼関係や自律心など、これまでの発達課題をクリアしてきていない者にとって、感染症予防法、避妊について説明したところで問題が解決することは多くはないだろう。性的関心から「性教育」に目を向けるのではなく、行動のある問題に直面させ、語り合いを重ねていくことが求められているといえる。

（3）学校教育における性に関する指導

小学校の学習指導要領では体育科保健領域、中学校の学習指導要領では保健体育科保健分野、高等学校の学習指導要領では保健の指導内容に、性に関する指導に関連した内容がある。また、特別活動においても、性的な発達への適応が指導内容に盛り込まれている。学習指導要領を根底に、それぞれの学校が教育活動を展開していくなかで、性教育は性に関する指導として小中学校では義務教育の一環となっている。しかし、学習指導要領には具体的な指導方法については明記されていないなかで、教諭がどう教えていくのか、どのような表現ならば可能であるのか、学校全体、地域や保護者との協議も重ね、模索していかなければならない。小林らの調査¹⁹⁾によると、中学校と、

高等学校の教育の現場では現行の性教育では遅れを感じていても、現実問題として指導内容が不明確であること、指導の機会がないこと、時間的な余裕がないことなどの理由から積極的にしたくても何から手を付けて実施していけばいいのかわからない、との報告がある。教育現場で何をどのように教えていくかは、学校関係者や保護者などの様々な意見があり、容易ではないだろう。継続して取り組む時間がないことや、学校において取り組みの格差があること、教育することによって反対に性行動を促すという考え方もあるということだけではなく、社会の変化に伴って学習指導要領が改訂されても、教員自身が現代の子どもたちを取り巻く環境や子どもの考え方の変化に戸惑いをもっているのかもしれない。

このような教育現場の現状がある中で石沢らの調査²⁰⁾に、小学校6年生の子どもをもつ保護者が考える性教育の主たる担当は学校が最も多く、次いで学校・家庭・専門機関との協同、という報告がある。これに関連して、増田らの調査²¹⁾で高校生に性教育の実施者を尋ねたところ、3学年の総数及び各学年とも、多い順に「保健体育の先生」「養護教諭」「保健師」「外部講師」次いで「母親」であった。このことから、性教育の主な担い手は学校、という意識が強いことが考えられる。学校は生活状況が違う子どもたちが集まる場所であり、個、集団それぞれに必要なに応じて指導が出来る環境にある。そのため、個々の状況に合わせた指導、サポートをしていく教育は必要不可欠である。田辺ら²²⁾は、教員が性教育を実践することで自分自身の性についての知識の理解が深まるなど、自らの成長を実感したものが多くいたことを述べている。教員が求められている役割を認識し、性教育に取り組むことで、子どもの教育のみならず自分自身への教育につながることは有益である。また、石川の調査²³⁾では性教育に対する保護者の意見として「家庭で、子どもと性に関する話をするきっかけになってよかった」「学校で正しい知識を教えてもらってありがたい」「保護者自身も勉強になった」「子どもが優しくな

った」などが挙がり、多くの保護者が肯定的意見を述べたことを報告している。性に関する指導は指導内容が明確でなかったり、適切な教材をどうするかなどで取り組みにくい内容となるかもしれないが、保護者と協力連携しながらプログラムを組んでいくなかで保護者や教員側の現状の理解を促したり、実態を知り必要な指導が行われやすくなると考える。

学校において計画的に性教育を進めるにあたり、性教育年間指導計画を作成している学校は、小学校で68.2%、中学校で51.8%、高等学校で作成していると回答した学校はなかったという調査²⁴⁾があるなかで、学校教育を終えた者が性教育を学ぶ機会はそれほど多くない。つまり、特に義務教育課程において議論を重ねたうえでの性に関する指導がなされなければならないだろう。また、高等学校を卒業して保育者や学校教員など子どもと関わり支援的立場、指導的立場になるものを目指す学生にとって、性に対する価値観を自己実現と関連づけられる関わり、自分の行動を意思決定できる力と確かな知識が子ども支援につながる。学校教育で性に関する教育内容が十分ではないならば、そのことに気づいた時点で性について考えていかなければならないし、学生たちに性のあり方を問い、考えてもらう機会を高等教育の中でも設けなければならないだろう。子どもと向き合うなかで性への対応も求められる専門職という自覚をもちながら、自分自身のあり方を見つめなおすことが第一歩だと考える。

4 質問紙調査の結果

実習は実際の現場で専門職としての学びを実践出来る機会であり、学生たちにとって学びや課題を見出す機会となる。そのため、二年次の施設実習において児童福祉施設に実習に行った者に対して、①施設実習における性的アプローチ（抱きつかれた）や性に関する発言や行動（性的なことを言われた、性に関する行動を見た、性に関する話し合いがもたれていた、など）に関わったかどうか、関わったならばその内容 ②記述内容に関し

でどのように感じたか ③記述内容に対してどのような対応（〇〇に相談、自分の中でこう考えるようにした、など）をしたか ④児童福祉施設における性の対応をどのように考えるか の4項目について回答を求めた。

（１）施設実習における性的アプローチや性に関する発言や行動についての関わり

以下は学生の記述内容の主なものである。

表3 質問項目①「施設実習における性的アプローチや性に関する発言や行動に関わったか、またその内容」についての記述内容

	記述内容
恋愛感情や好意のアプローチなど	<p>(児童養護施設)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記述なし <p>(知的障がい児施設)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「付き合ってください、彼氏いますか、未婚ですか、美人ですね」ってめっちゃ言われた。めっちゃ見られて昼食のとき違う席にいても私の隣や前に移動してきた。(a) <p>(知的障がい者施設)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障がい者同士の恋愛の姿があった。(b) ・何らかの愛情表現あるいは身体の接触があった。一方的なもので好意を向けるものだった。初めは身体（手を握り締めてきたり、自傷行為で自分に気をつけるような行為）を触られた。それからだんだんと手紙を渡してくるようになり、〇〇さんのこと好きですなどの内容が書かれていた（男子学生）。(c) ・「彼女いるんですか、分かれる予定とかないですよ」って聞かれた。別の人にお尻をなでまわされた（男子学生）。(d)
自他への身体的接触など	<p>(児童養護施設)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生の女の子が中学生の男の子に「身体を触っていいよ」という場面があったようで子どもたちが注意を受けていた。(e) ・中学3年生の女の子が中学2年生の男子数名に胸を触られている、ということが問題となっていた。女の子が呼び出され話を聞かれている場面があった。(f) ・小3、4の女の子の添い寝をしているときに胸をもんできた、幼児が幼児らしからぬ卑猥な言葉を発していた。(g) ・中学3年生の女子に後ろからいきなり抱きつかれた（男子学生）。(h) <p>(知的障がい児施設)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自慰行為をしているところをみた、していると言われた。(i) ・抱きつかれた。秋葉系アニメのHシーンを見せられ一緒にやりたいと言われた。自分のズボンに手を入れて追いかけられた。(j) ・5歳児が玩具を使ってマスターベーションをしていたと聞いた。(k)

	<p>(知的障がい者施設)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自慰行為を見た、男性利用者が女性利用者に抱きつく、男性利用者が別の男性利用者の服を脱がせ抱きつく。(l) ・普通に会話をしていたのに突然「胸触るぞ」といわれた。髪の毛の匂いをかいだり二の腕をつかんできたりした。(m) ・抱きつかれた。(n) ・Tシャツをめくって裸を見せたり、抱き着こうとしてきたが、職員が止めていた。(o) ・会うたびに「可愛いね、握手しよう」と言ってきた。最終的に胸に触れてきた。(p)
施設の対応	<p>(児童養護施設)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・寝るときには鍵を閉めることを徹底していた、施設内恋愛禁止。(q) ・中学生の男子にマスターベーションの方法などに対してどう伝えていくかを職員間で話していた。(r) <p>(知的障がい児施設)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習に関しては刺激しないようスカートは不可だった。(s)

（２）施設実習における性的アプローチや性に関する発言や行動についてどう感じたか

以下は学生の記述内容の主なものである。

表4 質問項目②「質問項目①の記述内容に関してどのように感じたか」についての記述内容

	記述内容
恋愛感情や好意のアプローチなど	<p>(児童養護施設)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記述なし <p>(知的障がい児施設)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初は好かれているから良いと思っていたけど、年も近いので少し嫌だなと思った。(a) <p>(知的障がい者施設)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・恋愛はありだと思いが、問題点が多いと感じる。(b) ・初めは何なのだろうかこの方は、と思っていたが好意や行動がエスカレートしていく度に職員に相談することが増加した。ある意味で恐怖。(c) ・人間なので当たり前だが、障がいを持っている方も異性を好きになったりするんだと思った。(d)
自他への身体的接触など	<p>(児童養護施設)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生なら興味本位であることなのか。(e) ・女の子の気持ちに分からなかった。最初はヘラヘラとした態度をとっていたが、最終的には職員の「嫌なら嫌って言いなさい。笑ってたら喜んでももらえと思われちゃうよ」という言葉に涙を流していたので、女の子も嫌だったことを知ることが出来た。(f) ・職員さんに聞いていたので「このことかな」と思った。卑猥な言葉に関しては、施設や家庭で覚えたのかなと思った。(g)

	<ul style="list-style-type: none"> ・とまどった。男女問わずスキンシップを求めてくる（抱きつかれたり、手を握ったり、膝の上に座ったり）が多いので、その1つだと思ったが小学生以上にされたのは想定外だった。(h) (知的障がい児施設) ・自分が親だったら自慰行為（オープンな状況）は止めてほしいと思った。(i) ・正直驚いて気持ち悪かった。(j) ・子どものその様な行為は寂しさからくるものだ聞いたことがあるので、何とも思わなかった。(k) (知的障がい者施設) ・知的障がいがあっても性的要求もあるのだなと当たり前に思った。(l) ・特に嫌な思いはしなかったけど、びっくりした。(m) ・良いか悪いかでいったら良い感じはしなかったが、そういうことがあるかもしれないと割り切っていたので気持ちの面では大丈夫だった。(n) ・特にへるものではないから何とも感じなかった。(o) ・障がいのせいなのか、甘えなのか分からないので仕方がない、と自分の中で処理した。(p)
施設の対応	(児童養護施設) <ul style="list-style-type: none"> ・鍵を閉めることはその通りだと思ったが、恋愛については個人の自由なので良いのでは、と思ってしまった。(q) ・職員（男女）が恥ずかしがらず、真剣に話し合っていたのでプロだなと感じた。(r) (知的障がい児施設) <ul style="list-style-type: none"> ・記述なし

(3) 施設実習における性的アプローチや性に関する発言や行動にどのような対応をしたか

以下は学生の記述内容の主なものである。

表5 質問項目③「質問項目①の記述内容に関してどのような対応をしたか」についての記述内容

恋愛感情や好意のアプローチなど	(児童養護施設) <ul style="list-style-type: none"> ・記述なし (知的障がい児施設) <ul style="list-style-type: none"> ・気にしていないようにふるまった。照れたりやめてくださいという対応をすると、過剰になったり相手の気に障ると思ったので。(a) (知的障がい者施設) <ul style="list-style-type: none"> ・職員に反省会のときに話をした。親御さんにもそのことを話しているようであった。(b) ・実習担当職員や主任に相談し、アドバイスや自分で少しずつ離れていこう、と考えた。「～のことで～の勉強をきているので、ごめんなさい」などと毎日同じことを何回も繰り返し言葉がけなどを行い伝えていった。(c) ・「彼女います」とありのままに伝えた。お尻を触られたことについてはやんわりと「やめてくださいね」と伝えた。(d)
-----------------	---

自他への身体的接触など	(児童養護施設) <ul style="list-style-type: none"> ・職員さんに聞いていたのでこのことかな、と思った。卑猥な言葉に関しては、施設や家庭で覚えたのかなと思った。(g) ・その時はすぐに引き離して、そのことには触れず会話を始めた。(h) (知的障がい児施設) <ul style="list-style-type: none"> ・自慰行為は職員がさりげなく手を離してやめさせていた。(i) ・学校の先生、友人に相談。他にも同様のことをしていることを知り、そういう人だということにした。(j) ・職員の方から聞いただけなので。(k) (知的障がい者施設) <ul style="list-style-type: none"> ・知的障がいがあっても性的要求もあるのだなと当たり前に思った。(l) ・職員の方には必ず報告するようにしていた。自分でもその方に「何してるんですか」と注意をしていた。(m) ・1回目はさらっと受け流した。職員の方もそれはいけないことと、利用者の方に伝え、私にも気を付けてくださいと伝えてくれた。いけないことですよ、と伝えてくださいと言われたので、私もそう対応した。(n) ・職員の方は外に行ったときに同じようにしてしまうから注意してくださいとのことだった。その人のためを思って優しい言い方で対応した。(o) ・握手はした。胸を触ったことに関しては、「やめてくださいね」と優しく伝えようと、「ごめんね」と謝ってきた。(p)
-------------	---

(4) 児童福祉施設における性の対応をどのように考えるか

以下は学生の記述内容の主なものである。

表6 質問項目④「児童福祉施設における性の対応をどのように考えるか」についての記述内容

児童養護施設	(意見) <ul style="list-style-type: none"> ・とても難しい問題。説明をするのも伝えにくいし嫌悪感を持たせないようにするのが大変かなと思う。 ・性的虐待を受けてきた子どももいて、性に対して一般家庭の子どもより偏っている面もあると思うので出来るだけした方がいい。 ・自分を守ることは教えたいと思う。 (具体的対応) <ul style="list-style-type: none"> ・中学生くらいになると自慰行為をしなくなる子どももいると思うが、一人部屋ではない子どももいるだろうし、冷やかしなどしないですっかりと一人ひとりと話をした方がいい。 ・誤った知識がうえつかないように子どもと一緒に考える場をもち、伝えていくことが良いと思う。傷を負っている子どもには個別で機会をみて少しずつ伝えていく。
--------	---

知的障がい児(者)施設	<p>(意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絶対に必要。入所施設内でも性的な事件が起きていると聞いた。そのようなことを未然に防ぐためにも職員がそのような時間を設け指導していくことはとても重要。 ・身体の発達、脳の発達レベル、虐待内容によって個々に対応は違うと思うが、性をどう捉えるべきものなのかをしっかりと伝えていくべき。 ・性教育は必要であると思う。自分の身体を守るための知識とともに、他の人の気持ちと身体を尊重すること、生理的要求への知識と理解、暴力的な性的行動への拒否権を持っていることを教える必要がある。 ・知的障がい児施設においては親子ともに性教育は必要だと思う。 <p>(具体的対応)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実年齢と精神年齢は利用者によって異なるが、何かあるごとに言葉をかけ、長い目で見て地道に少しずつ一人ひとりとコミュニケーションを図り、自分の知る知識や経験、社会性を伝えていくことが大切だったと思う。 ・個々の発達の違いがあるように性に対しても関心が出る時が違うため、全体と、個々の発達に合わせて教えたり考えさせていくこと、自分を大切にすること、などを時間をつくり伝えていくことが必要。 ・その都度いけないことだと伝えること。 ・知的な障がいでの性的なことをコントロールできなくて行動してしまうとのことで、職員の方もその都度注意をしていたので、諦めずに声をかけることが重要で障がい者だからいいのではないのだと感じた。社会に出るのが難しくても出たことを考え出来ることからやり、少しずつ増やしていると思った。 ・職員からの話で、夜間等の男女の接触を避けるため階段を男女別になっている、未成年の入所者間の妊娠・中絶という現状、などを聞いて、物理的に男女は必要(活動等)以外は離すべきではと思った。
-------------	---

5 質問紙調査を踏まえた児童福祉施設における性についての支援

質問項目①の性的アプローチや性に関する発言や言動に関して、「恋愛感情や好意のアプローチなど」では知的障がい児(者)施設でのみ関わりがあった。学生に対してや利用者同士の異性への関心を、利用者の言動から学生は実感していた。「自他への身体的接触など」では児童養護施設でも見られており、思春期を迎えた者同士が生活を共にするなかで入所児同士の性的関わり場面や、実習生への身体的接触などの場面があった。また、

知的障がい児(者)施設では突発的な身体的接触や発言が多く、異性に追いかけられるという経験をしている学生も多かった。このような入所者同士、入所者と実習生同士の性的トラブルを防ぐための施設側の対応として、予防策として身だしなみを考えたり環境を整えたり、日ごろから職員の話し合いをしていく、という対応策を学んだ者もいた。

このような関わりについて、質問項目②でどのように感じたかに関しては、実習での性に関連した関わりに対して戸惑いや恐怖を感じている者が少なくなかった。「恋愛感情や好意のアプローチなど」に関する性的関わりとして、好意を寄せられるという体験は年齢が近い分だけ実習生側の心理的負担も大きくなるようであった。相手が自分よりもより年上、より年下であることが冷静的に考えられるようになっており、歳の差が少ないと相手をより身近に意識してしまうのかもしれない。「自他への身体的接触など」に関する性的関わりでは、児童養護施設の子どもの言動に理解できないという感情が目立った。児童養護施設で生活する子どもたちの現状は、授業の中で学んできた内容であり、複雑な感情をもち対人関係の難しさを抱えている者が多い、ということは伝えてきている。しかし実際に実習で触れ合う子どもたちの言動には、衝撃を受ける実習生は多いようであった。突然施設にやってきた実習生は、たった2週間という限られた期間で子どもたちと関わることになる。家庭環境や子どもの生育歴などを詳しく知ることもなく、子どもと触れ合っていくため子ども理解は簡単に出来ることではない。しかし理解することが難しいと感じた者も、その後の職員と子どもとのやりとりの中で子どもの想いに気づくことが出来たり、職員の話聞く中で自分自身の感情や考えを整理できている者もいた。また、子どもたちからのスキンシップが多いことも施設で生活する子どもの特徴として学んできた内容である。しかしそのこと自体を頭では理解していても中学生や高校生などの異性からのスキンシップは、実習生にとって対応への困難さをもつ関わりとなっ

ていた。知的障がい児（者）施設での「自他への身体的接触など」に関しての感情は、驚き不快さを感じる者、自分の中で割り切る者、深く気に留めない者など、学生によって様々であった。直接的でオープンであるほど驚きを感じており、親密で閉鎖的であるほど不快さを感じているようであった。質問項目③のどのように対応したか、については職員からの助言や職員と利用者とのやりとりを真似て対応している者が多かった。共通していることとして、事実を客観的に冷静に繰り返し伝えていくこと、身体的接触に関してはさりげなく、しかししっかりとやめさせていくこと、などがあった。また事前に職員から性的関わりの可能性を示唆された者や、実習に臨むにあたって性的関わりがあるかもしれないと意識していた学生は、大きな困難を抱えていないようであった。

質問項目④の児童福祉施設における性の対応についての考えは、ほぼ全員の学生が何らかの方法で性について伝えていくことが必要だと答えている。これらは授業で学んできたことを踏まえてであったり、実習で性的関わりを目の当たりにしたことで考えさせられていたりすることが窺えた。児童養護施設では個々への対応を大切にしていくという意見が多く、知的障がい児（者）施設では個々の発達状況や理解度を踏まえたうえで繰り返し伝えていくことを大切にしていく、という意見が多かった。

河野²⁵⁾は子どもたちに対する性教育で大切なこととして、子どもたちの現状や心配な点・気になる点を詳しく聞き、対象の子どもたちにふさわしい性教育プログラムを作成すること、と述べている。河野の調査によると、児童福祉施設等から産婦人科の思春期外来に紹介された患者は、平成13年～平成21年までに計40名で、平均年齢は14.8歳±1.7歳（10～17歳）であったという。性感染症や性的虐待、人工妊娠中絶などを主訴として来院しており、一般の思春期患者と比較すると性感染症や性的虐待が多くなっている。虐待の被害者であるとともに、性感染症などの疾病にもかかっている。そして怠学傾向で学校教育による

性教育を受けていない者が多い中で、無知ゆえに性感染症や望まない妊娠を繰り返す、このような連鎖を断ち切るために施設における性教育の必要性を論じている。児童養護施設における性への対応は、職員も戸惑うことが多いと考える。「なぜいけないのか」と開き直ったり、反発してくる子どもも多々いたりするだろう。そのようなときに決して諦めずに向き合っていく、という姿勢でいられるかが継続的な援助、実効性のある支援につながっていく。困ったときに、安全地帯と思える人がいて場所があること、不安でいっぱいになったとき誰かに相談しアドバイスをもらって行動できること、そのような支えがあることが、子どもたちの拠り所となり、施設保育士に求められる役割であると考ええる。どんな性教育のプログラムを作成しても、プログラムの効果を一元化できないことは多々あるだろう。なぜなら子ども（利用者）と保育士との間に信頼関係がある関係性だからこそ、プログラムを遂行して子どもにとって良い結果につながった、ということが考えられるからである。しかし、研修を積んで想定されるマニュアルを作成しておくことは必要である。性への対応についての組織づくりをすること、子どもから聴き取り分かりやすく継続的に取り組んでいくこと、ルールを決めること、これらを職員同士が話し合い共通理解し真剣に子どもと向き合うなかで、学生の自由記述にもあった「プロフェッショナル」としての役割を担うことにつながっていくと考える。

知的障がい児（者）施設における性の対応については「継続的に繰り返し伝えていくこと」を多くの学生が必要だと回答していた。そして実習での経験から、知的に障がいをもった者への性への対応については一人ひとりの発育状況や個人差を踏まえた内容の重要性を学んでいた。性の対応では、その者に合わせたところから始め、してはいけないこと、それがなぜいけないのか、を考えていきながら性の自己管理を目指すことが求められると考える。生活の中で「それはいけない」と一方的に伝えていくのではなく、「なぜいけないの

か」「なぜ人にとって性は大切なのか」を双方のやりとりの中で考えられる関わりをつくる。北沢²⁶⁾は、「大切ないのちをどう生きるか、如何に繋げるかによって、単なる性に関する知識から『性』が『生』と密接な関係にあることに気づく、これが性教育の目的である」と述べている。学生の自由記述の中には、「恋愛については個人の自由なので良いのでは、と思ってしまった」と、恋愛を禁止にしている施設の方針に対して複雑な思いを抱いているものがあつた。性の対応は、こちら側からの一方通行ではなく、生きていく中でときに自己管理をし、ときに自己表現をしていくものであろう。学生が感じた複雑な思いは丁寧にすくいあげ、学生間に返していくことが性への対応を学ぶうえで生きた教材となると考える。また、同じ体験をした学生でも感じたり考えたりした内容はそれぞれであるため、その違いを共有することで自分を客観視し振り返ることにつながったり、多くの考えに触れ1つに捉えることができない性の在り方を学ぶきっかけになるといえる。学生が実感したことを踏まえて学生への学びに返すとともに、継続的な調査をしていきながら性の対応についての教育内容を構築していく役割が、保育士養成課程にはあると考える。

おわりに

質問紙調査を踏まえた児童福祉施設における性への対応から明らかになったように、施設保育士のあり方が問われている。今後資格を取得して保育士になる学生は、実習や現場に出る際にしっかりと知識と、利用児・利用者に対する理解が必要になる。本学の保育士養成課程の教員たちは、福祉系・養護系・心理系等の関係教員と今回の結果を踏まえて、施設実習を行う際に、保育士としてどう対応するのか、しっかりと教育プログラムを作成する必要があると考える。

注

- 1) 児童福祉法第18条の18「保育士となる資格

を有する者が保育士となるには、保育士登録簿に、氏名、生年月日その他厚生労働省令で定める事項の登録を受けなければならない。」

- 2) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長から都道府県知事・指定都市市長・中核市市長あてに出された、雇児発第0227005号通知（平成15年12月9日付）のこと。主旨については、「今般、児童福祉法の一部を改正する法律（平成13年法律第135号）等によって整備された保育士関係規定が施行されたことに伴い、別紙のとおり保育士養成施設の指定及び運営の基準を定めたので御留意のうえ、その適正な実施に特段の御配慮をお願いするとともに、管内の指定保育士養成施設の所長宛に通知されたい。」とある。
- 3) 厚生労働省 雇用均等・児童家庭局で昨今の子どもや家庭を取り巻く社会の変化や、保育士や保育所に求められるニーズの多様化にあわせて、厚生労働省 雇用均等・児童家庭局で、保育士養成課程の改正や保育サービスの質に関する調査研究、保育士に求める専門性や目指すべき将来像を踏まえた上で、カリキュラムの検討等についておこなう保育士養成課程等検討会を設置した。中間報告は第6回が終了した後の平成22年3月24日に出された。同検討会では、現在（平成24年12月）までに8回の会議を行っている。
- 4) ここでいう「児童福祉施設」とは、本学の学生を受け入れている施設に限定している。具体的には、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、障害児入所施設、一部成人対象の障害者支援施設で、保育所や乳児院、母子支援施設、児童自立支援施設、児童厚生施設、児童家庭支援センター等の施設は除いている。
- 5) アメリカの心理学者・アブラハム・マズロー（Abraham H Maslow）は、人間の欲求を低次から高次の順で分類し、5段階のピラミッド型の欲求の階層によって示した。マズローによって階層化された欲求とは、生理的欲求・安全欲求・愛情欲求・尊敬欲求・自己実

現欲求の5つある。

- 6) 石澤方英「児童福祉施設における性教育の現状と課題－性的問題の視点をとおして」『育ちと臨床10』2011年、pp.147-150
- 7) 本稿における児童福祉施設（児童養護施設）のケアワーカーとは、施設で利用児・者に直接かかわる職員をいう。具体的には、保育士、児童指導員等がそれにあたる。
- 8) 福知栄子、鈴木かおり、梅野潤子、他3名「児童養護施設で暮らす子どもの性の健康ニーズを満たすための支援－児童養護施設ワーカーと助産師の協働事例から」『中国学園紀要(8)』2009年、pp.61-69
- 9) 榊原文、藤原映久「児童養護施設入所児童に対する性（生）教育プログラムの効果測定」『子どもの虐待とネグレクト：日本子ども虐待防止学会学術雑誌13(3)』2011年、pp.396-408
- 10) 心理的ストレスの測定方法の一つ。児童や大学生、看護師、教師等のいろいろな立場や専門職に合わせたものがある。
- 11) 厚生労働省エイズ動向委員会「平成23(2011)年エイズ発生動向一概要一」2011年
- 12) 今井博久「高校生のクラミジア感染症の蔓延状況と予防対策」『日本科学療法学会雑誌感染症学会誌』55号2巻、日本化学療法学会、2007年、pp.135-142
- 13) 厚生労働省 感染症発生動向調査 <http://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0411-1.html>
- 14) 西頭知子、佐々木くみ子、末原紀美代「過疎地に住む中学生の性行動と性意識に関する調査研究」『母性衛生』53号1巻、母性衛生学会、2012年、pp.81-88
- 15) 青少年の性行動全国調査委員会「青少年の性行動わが国の中学生・高校生・大学生に関する第7回調査報告」日本性教育協会、2012年、pp.24-58
- 16) 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会「児童・生徒の性」学校図書、2005年
- 17) 厚生労働省「平成22年度衛生行政報告例の概況」2010年
- 18) 鈴木 佳代「現代高校生の生活と性行動」『教育福祉研究』9号、北海道大学、2003年、pp.37-49
- 19) 小林蕁子、松上さつ子、中村友美、他2名「あなたの人生、これからどう生きていきますか？」『鈴鹿国際大学短期大学部紀要』20号、鈴鹿短期大学、2000年、p.57
- 20) 石沢敦子、矢島まさえ、佐光恵子、他2名「思春期における子どもの性教育のあり方（その1）」『群馬パース学園短期大学紀要』6巻1号、群馬パース学園短期大学、2004年、pp.3-11
- 21) 増田安代、今村恭子「高校生の性教育に関する課題を探る」『九州看護福祉大学紀要』九州看護福祉大学、7巻1号、2005年、pp.79-88
- 22) 田辺美江子、艮香織、渡辺大輔「日本における性教育の実態」『日本教育学会大会研究発表要項』68号、日本教育学会、2009年、pp.382-383
- 23) 石川裕子、上甲廣文、光宗勝次、他4名「学校における性教育の指導に関する調査・研究」『愛媛県総合教育センター研究紀要』愛媛県総合教育センター、2005年、p.105
- 24) 同上、2005年、p.106
- 25) 河野美江「児童福祉施設等における性の問題と性教育の実践」『島根大学社会福祉論集』3号、2010年、pp.45-53
- 26) 北沢杏子「性を語る会」『性教育研究会第2回学術大会誌』性教育研究会、2012年、p.80

参考文献

- 志村聡子、田畑光司「保育士養成課程における実習事前事後指導：初めての“施設実習”に向けた動機形成への取り組み」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇9』2009年、pp.305-311
- 加藤洋子「保育士養成課程における福祉施設実習の援助実態に関する一考察」『洗足論叢(37)』

- 2008 年、pp.231-243
- 石澤方英「児童福祉施設における性教育の現状と課題－性的問題の視点をとおして」『育ちと臨床 10』2011 年、pp.147-150
- 榊原文、藤原映久「活動報告 児童相談所と児童養護施設との連携に基づく性（生）教育プログラムの取り組み」『子どもの虐待とネグレクト：日本子ども虐待防止学会学術雑誌 12（2）』2010 年、pp.288-294
- 榊原文、藤原映久「児童養護施設入所児童の性問題行動について－児童養護施設職員へのフォーカス・グループ・インタビューを通じて」『子どもの虐待とネグレクト：日本子ども虐待防止学会学術雑誌 12（3）』2010 年、pp.386-397
- 榊原文、藤原映久「児童養護施設入所児童に対する性（生）教育プログラムの効果測定」『子どもの虐待とネグレクト：日本子ども虐待防止学会学術雑誌 13（3）』2011 年、pp.396-408
- 河野美江「児童福祉施設等における性の問題と性教育の実践」『島根大学社会福祉論集 3』2010 年、pp.45-53
- 福知栄子、鈴木かおり、梅野潤子、他 3 名「児童養護施設で暮らす子どもの性の健康ニーズを満たすための支援－児童養護施設ワーカーと助産師の協働事例から」『中国学園紀要（8）』2009 年、pp.61-69
- 柏女霊峰「子ども家庭福祉論 第 2 版」誠信書房、2011 年
- 辰己隆、岡本眞幸編「保育士をめざす人の養護内容」みらい、2012 年
- 山縣文治、柏女霊峰編『社会福祉用語辞 第 8 版』ミネルヴァ書房、2010 年
- 森上史朗、柏女霊峰編『保育用語辞典 第 6 版』ミネルヴァ書房、2010 年
- 厚生労働省 雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」2003 年
- 厚生労働省 雇用均等・児童家庭局 保育士養成課程等検討会「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」2010 年
- 埼玉東萌短期大学「2012 学生便覧」2012 年
- 曲山さち子、加藤サツキ、黒崎治美、他 2 名「千葉県内の中学校における性教育の実態」『帝京平成看護短期大学紀要』18 号、2008 年、pp.17-19
- 梅木彰子、木子莉瑛、木原信市、他 2 名「性教育の在り方について」『熊本大学教育学部紀要』48 号、1999 年、pp.109-118
- 大橋裕子、丹羽さゆり、水谷聖子、他 4 名「性教育の実践に関する文献検討」『中部大学生命健康科学研究所紀要』1 号、2005 年、pp.33-40
- 近藤卓「自尊感情と共有体験の心理学」金子書房、2010 年、pp.98-120
- (埼玉東萌短期大学 専任講師 伊藤陽一)
(埼玉東萌短期大学 助教 黒沼茉未)